

猿橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

当たり前のことを当たり前にする

校長 澁谷 一男

天高く澄み切った秋の空。吹く風もさわやかで心地よい。青空によく映える緑の「芝生広場」を今日も裸足の子どもたちが元気に駆け回っている。猿橋小学校の好きな光景の一つだ。

今年4月に行われた全国学力・学習状況調査の結果が、先月末に公表された。文部科学省によると、秋田県や石川県、福井県などが例年と同じく上位を占める一方、上位と下位との差が縮まり、全体の底上げが図られたという。

当、猿橋小学校の6年生だが、国語A・B、算数Aは全国平均を上回り、算数Bは全国平均とほぼ同等という結果であった。「A」は主に「知識」に関する問題、「B」は主に「活用」に関する問題であるが、当校では、どちらかと言えば「B問題」に課題があり、これは一般的な傾向でもある。

もちろん、この調査の結果は、子どもたちの学力を見る指標の一つに過ぎない。それでも、この結果を見る限り、これまで学習したことが概ね身に付いており、好ましい状態であると言ってよいだろう。

ところで、今でこそ全国一と言われる秋田県だが、昭和30年代には40位代を低迷していたという。その後、地道に教育改革に取り組み、現在の結果があるということだった。「特別なことは何もしていません。当たり前のことを当たり前にする、できるまで粘り強く教えることが大切なのです。」以前伺った秋田県教育委員会の方のお話である。

大事なのは学力調査の点数を上げることではない。毎日の授業をいかに魅力的なものにするかだ。当校では、「子どもたちが目を輝かせて取り組める課題を提示したい」「子ども同士が互いの考えを述べ合って、高め合えるような話し合いをさせたい」「子ども自身が何を学んだか、しっかり自覚できるようにしたい」このような授業像を求めて、全職員で授業づくりに取り組んでいる。これは特別なことではない。魅力のある授業で子どもたちに力を付けることは、学校の最も重要な使命である。まさに「当たり前のこと」なのだ。

先日、猿橋中学校の生徒が中学校区にあいさつの輪を広げようと、児童玄関前であいさつ運動を行ってくれた。持参した横幕には「あいさつが当たり前」という大きな文字。2学期初め、やや湿りがちだったあいさつも、最近は復調の兆しが見られる。ここにも当たり前に取り組むことができる。

